

☒ 書閲覧室では、昨年の12月、4年ぶりにお話の会を再開しました。もともと週に1回、絵本の読み聞かせを行ってきたのですが、コロナ禍で中断せざるをえず、昨年の秋から再開に向けて準備をしてきました。お話の会は子どもたちと一緒にお話を楽しむ15分ほどの小さな会です。4年の間に図書室のメンバーも変わり、お話の会を経験したことのないスタッフもいる中、場所作りや会の流れを確認し、本を読む練習をしてきました。

クリスマスの時期だったこともあり、用意した絵本はクリスマスにちなんだもの。ドキドキしながら迎えた当日でしたが、時間になると子どもたちが集まり、4年ぶりだけでも昔と変わらないお話の会を行うことができました。終わったとたんに大きく息を吐き出して、こんなに緊張していたのだと自分でも驚き、また、当たり前のようにできていたことができなくなり、再びできるようになったことが、こんなにも嬉しいものなのだと改めて感じました。これからもお話の会は行っていきたいと思います。



季刊トライホークス 2024年 | 74号
発行日……2024年3月1日 | 発行人……中島清文
発行所……徳間記念アニメーション文化財団
東京都三鷹市下連雀1-1-83 三鷹の森ジブリ美術館
編集……石光紀子 塚原瑞穂 | デザイン……川島弘世
印刷……図書印刷株式会社 | 非売品

本棚より

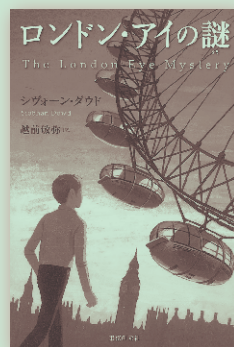
トライホークスのおすすめの本を紹介していきます。
トライホークスの本棚の中の一冊から、みなさんの本棚の一冊にしていだけたら嬉しいです。

ロンドン・アイの謎

イギリスにあるヨーロッパ最大の観覧車「ロンドン・アイ (London Eye)」。毎年たくさんの人が訪れるこの人気観光スポットで行方不明事件が起こりました。観覧車に乗ったはずのサリム少年の姿が消えてしまったのです。

行方不明になったサリムを見つけ出したのは、彼のいとこのテッドとカットのきょうだいでした。テッドは自閉症スペクトラムとおぼしき姿で描かれており、人の気持ちを察することは苦手ですが、興味あるものに関してはすばらしい集中力を見せます。彼は気象学に興味を持っているのですが「気象予報士は観察と計算によって仮説を立てていき、その仮説が正しければ正確に気象パターンを予測できる」という考えを事件にも当てはめて9つの仮説を立て、姉のカットとともに事件を追ったのです。

子どもたちは自分たちだけで事件を解決しようと思ったわけではありません。でも、彼らが見たこと、考えたことを大人はなかなか受け取ってくれないのです。特にテッドの発言はストレート過ぎて周りをハラハラさせ、彼以外の人にとっては全く興味のない話題、例えば気象の話だったりするので途中でさえぎられます。「ぼくの話はだれも聞いてくれない。カットが話すとみんな聞く」。誰よりも事件の謎にせまっているのに「またあとでね」と流されてしまうのです。もどかしさを感じつつ、2人のきょうだいが自分たちで手がかりをつかみ真相に迫っていく様は胸がすく思いがします。大観覧車での行方不明事件は、ミステリ要素以外にも様々な伏線や人間模様も含んだ読み応えたっぷりの物語です。



ロンドン・アイの謎
著者……シヴォーン・ダウド
訳者……越前敏弥
東京創元社 2,090円

黒井 健

Ken Kuroi

いつもそばにある本

前号の「本棚より」でご紹介した絵本『ごんぎつね』。今回、その『ごんぎつね』の挿絵を描かれた黒井さんに本を紹介していただきました。多くの人に親しまれているお話にどのように絵を描いたのか、また絵本の中に広がる世界についても触れられています。選ばれた6冊の絵本と画集。改めて手に取り絵をじっくりと見たくになりました。



* * * * *

何度か引っ越しして書棚を整理してきた。そのたびに寄贈したり古書店に渡したりしてきたが手放せなかった本が書棚にある。多くは絵本と画集で、繰り返し見続けてきた大切な本であり、私の指標となり目指す道を示してくれた本である。

童話「ごんぎつね」新美南吉

私が絵を担当した絵本で恐縮だが、転機となった大切な絵本だ。偕成社より出版された絵本『ごんぎつね』は出版から38年、多くの読者の支持を得て、いまだに書店に並んでいる。

原作の「ごんぎつね」は、昭和30年頃から国語の教科書に採用され、現在に至ってもほとんどの教科書が掲載している国民的な童話である。したがって添えられた挿絵は数知れず、絵本でも多くの名手が絵を添えていて、すでに定番として書店の一角を飾っている作品も目にしていた。

当時、私は自分の描く絵を信じられずにいた。絵本を描き始めてすでに10年以上が経ち、出版された絵本が何冊もあった。しかしかわいい主人公を描きながら、自分自身の童画に対する既成概念に辟易していたのだろうと思う。

編集氏が「ごんぎつね」を、かわいい絵しか描いていない私になぜ依頼してくれたのかいまだにわからない。そのシリーズは〈大人の絵本〉と銘

うたれていて、既刊の数冊は画家、版画家などが絵を担当していて美術画集のような絵本だった。

自分の絵に希望を失っていた私が全文を読んでみると、それまで知っていたはずの「ごんぎつね」が、まるで違う童話のように心に響いて来た。自分の行いに悔いたごんの孤独感と悲哀が迫ってくる。いったいどう描いたらいいのか、私のそれまでの絵では全くイメージできなかった。描き始める糸口すら探せない私は、なぜ作家は童話を悲劇に終わらせたのかを探しに「ごんぎつね」が書かれた南吉さんの故郷に向かった。愛知県半田市に残る南吉さんの生家と養子先を訪ねて彼の姿を追いつめながら、スケッチするでもなく2、3日ぼんやり過ごした。帰宅してから少しずつ描いてみたがイメージは相変わらず不確かなままで、とにかく描かなければ始まらないと最初の絵に着手した。それまで描いたことのない絵が現れた。輪郭もはっきりしない暗い色合い、これでいいのかと不安になるが、童話を何度も読み直してもそれ以外の絵はないように思われた。薄氷を踏むような不安の中ですべての絵が描き上がってしまった。

「こんな絵で絵本になるのだろうか。」

恐る恐る編集氏に見てもらった。

「いいね！」

それまでの緊張感がその一言で解けた。安堵感は筆舌に尽くしがたいほどだった。後になって思

ったことだが、この絵本を描いている間、私の心は南吉さんの故郷にあって、その地で感じたままを描いていったような気がする。それまで制作していた絵本と全く違った絵本になった。〈作った〉というよりも〈生まれた〉といった作品に思われた。

この絵本の出版後の評価は前述した通りで、読んでくださった方にも自分の感じた心が伝わったと確信できたことは大きな喜びとなり、その後の私を支えてくれている。

C・V・オールズバーグ

絵本『ごんぎつね』が出版されてから少しして書店で、オールズバーグの絵本『急行「北極号」』『西風号の遭難』を手にして驚いた。絵本の中に広大な雪原や夕陽に映える空が広がっていた。絵本で多くの画家が描く同様のモチーフを見てきたがこれほど壮大な表現を見たことがなかった。その後『ハリス・バーディックの謎』『ジュマンジ』『名前のない人』と出版される本を見るたびに圧倒された。なんとか会って話をしてみたい、原画を見てみたいと思い始めていた。

願い叶って1996年、オールズバーグ氏に会うために満開のマグノリアが咲くボストンに立った。そこから南へ60キロ余、ロードアイランド州の州都プロビデンスの静かな住宅地にある彼の家に着く。門を開けると、アプローチのタイルにチョークで描かれたカラフルな絵がかすれた様子もなく残っている。微笑ましい光景に人柄が伺われる。よく整理された居間でオールズバーグ氏と会い、絵本の制作についての話を伺う。しばらくして原

画見たさに仕事部屋に案内してもらった。そこは整然としていて大きなイーゼルが置いてあるばかりで絵が見当たらなかった。既刊の原画はもとより制作中の絵も見当たらない。聞けば絵はほとんど持っていないという。売却したか蒐集家を持っているらしかった。どうしてもと願って見せてもらった絵は『ハリス・バーディックの謎』の表紙に使われた原画だった。原画はA全サイズ*の大きなパステル画だった。絵本での感動を超えて壮大にして繊細、凛とした空気をまとっていた。

「そうか、この大きな絵を縮小して絵本になっていたのだ。絵本の原画は全てこのサイズで描かれていたんだ！」

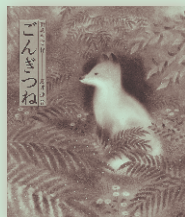
その後、私も必要があればオールズバーグ氏に倣って大きな紙に向かうが、まるで小舟で大海に漕ぎ出すような心細さで、彼の画力に改めて圧倒されている。

*A全サイズ 594×841mm

くろいけん

新潟県新潟市生まれ。新潟大学教育学部美術科卒業。代表作に『ごんぎつね』、『手ぶくろを買いに』（新美南吉／作）、『猫の事務所』『水仙月の四日』（宮沢賢治／作）など300冊以上の児童文学や絵本の挿絵を手掛ける。2023年日本児童文芸家協会児童文化功労賞受賞。2010年より、新潟市立中央図書館こどもとしゃかん名誉館長に就任。2003年、山梨県の清里に「黒井健絵本ハウス」を設立。

トライ
ボックス
の本
ごんぎつね
作…新美南吉
絵…黒井 健
偕成社 1,540円



ごんぎつね
作…新美南吉
絵…黒井 健
偕成社 1,540円



急行「北極号」
絵と文…C・V・オールズバーグ
訳…村上春樹
河出書房新社 絶版
◆現在はあすなろ書房より刊行



西風号の遭難
絵と文…C・V・オールズバーグ
訳…村上春樹
河出書房新社 1,656円

◆月夜のみみずく
詩…ヨレーン 訳…どうなおこ
絵…ショーエン・ヘル
偕成社 1,320円

◆あかいくつ
作…アンデルセン 文…神沢利子
絵…いわさきちひろ
偕成社 1,320円

◆ムーミン画集 ふたつの家族
絵・文…トーヴェ・ヤンソン
講談社 2,860円

本を手にする 道のり

トライホークスのおすすめの本ですが、今では販売が終了してしまい、古本屋さんにて購入する、もしくは図書館で借りることしか読めなくなってしまった本があります。これらの本を「ストーリー」を読みどころにして紹介していきたいと思います。この機会に興味を持っていただき図書館にぜひ足を運んでみてください。

シェパートン大佐の時計

主人公デイビドは足が不自由だけれども想像力が豊かな10歳の少年です。ある日、彼は第1次世界大戦の始まった1914年発行の1枚の新聞記事を手に入れます。その記事には「シェパートン大佐事件の評決、なぞを含むおそろべき悲劇。農場の火事真相不明」と見出しがあり興味を引きました。なぜなら建具店であるデイビドの家には50年前から預けられたままの大時計があり、その預け主がシェパートン大佐だったのです。デイビドはこの記事を手がかりに、農場の跡取り息子で活動的なアーサー、牧師の息子で発明好きなピーターの2人の友だちと共にシェパートン大佐の秘密を追いかけます。

物語の舞台はイギリスの架空の町、ダーンリイ・ミルズです。以前宮崎駿監督がイギリスを旅した時、この本の挿絵によく似た坂の多い町にレンガ造りの家々が連なる風景をたくさん目にしたそうです。まるで実在の町が舞台になったかのような詳細な描写、そして丁寧に描かれた挿絵が読む者をお話の舞台に誘ってくれます。

シェパートン大佐とは何者なのか？ 50年前に起きた事件とは？ 今も引き取り手を待っている大時計に隠された秘密とは？ 少年たちがたどりついた真相とは何だったのか、挿絵とともに楽しんで欲しい1冊です。



シェパートン大佐の時計

作…フィリップ・ターナー
訳…神宮輝夫
岩波書店 品切重版未定

サティン入江のなぞ



サティン入江のなぞ

作…フィリップ・ターナー
訳…高杉一郎
岩波書店 品切重版未定

10歳の女の子ケート・トランターは、ある日教会の墓地の中で、今まで誰も場所を教えてくれなかった自分の家の墓石を見つけました。ケートはお父さんの名前を知りません。知っているのはケートが生まれた日にお父さんが海でおぼれて亡くなったことだけです。墓石には「アルフレッド・ロバート・トランター」という名前が刻まれていました。

ケートが再び墓地を訪れてみると、トランター家の墓石が無くなっていました。墓石が無くなったことを兄のランダルに話しても信じてもらえません。その上お父さんの名前は「アルフレッド」ではなく「フレデリック」だと言います。そして、サティン・ショアと呼ばれる入江で何か恐ろしいことが起こったということをケートは初めて知ります。「おとうさんのことで、すぐになにかをしなくちゃいけないわ。なにかだいじなことを。でないと、わたしは破裂して——爆発してこなごなになってしまうわ」。もやもやとした思いや不安は、父親の死の真相を知りたいという行動となり、ケートは1人入江に向かいます。

家族の秘密を少しずつ知っていく10歳の少女。子どもが抱えるには重いと思える事実を、彼女がどうやって受け止めていったのか。作者は心理描写の巧みさで少女の内面を描きだします。はたしてこれは児童文学なのであるかと思わずにいられない重く深い物語です。児童文学は子どもだけのものではなく、大人のためにもあるのだと思わずにはいられません。